3

3. 研究ノート - 13

Writer
徐 英杰　XU YINGJIE
博士後期課程芸術専攻芸術学領域 2 年

美術教師の芸術教養と教育教養

美術専門家から美術教育家への転換

美術教員養成領域における中国と日本の交流が行われたのは、1990 年代以後のことである。2007 年に中国・上海で行われた「中日美術教師教育論壇」では、学者や大学教員たちが両国の美術教員養成の状況と経験を語ることで、理解と関心を深めた一方で、自国の特色と課題の自覚も促したことが見て取れる。

日本留学中の筆者は、その談話的な教育交流の延長として、学術研究の側面から、両国の美術教員養成教育についての研究を思い立った。そして、教職を目指す学生を育てる場合に、どんな美術を教えたらよいのか、そしてどんな知識を重視すべきか、という素朴な疑問から始めた。

実は現在に至るまで、美術教員養成教育の在り方については、両国の社会のどちらにおいても二つの声がある。一つは、美術専門的な知識、いわゆる絵画、デザイン、工芸などのような実技的な知識を重視する声である。もう一つは、いわゆる美術教育法や指導法などのような教職的な知識を重視する声である。前者は表現を重視し、技法の基礎練習と制作の授業をカリキュラムの大半に設置することを主張するものであるのに対して、後者は教職専門教育としての側面を重視し、美術教育実践と方法論などの授業をカリキュラムにもっと取り入れるべきだと主張している。

美術教員養成にとっては、両者とも欠くことのできない知識だと思われるが、どのようなバランスで両者を配分すればよいのかが議論の焦点となっている。日本でもこの議論は当然あったが、日本より更に激しい議論は 90 年代以後の中国で高まってきた。それは、後者の発展を期待する論者が、前者の観点を強く批判した状況である。しかし、後者の理想の実現にはまだ隔たりがある。現状としては、実技や表現に忠実な教員養成教育は中国の美術教員養成領域において根強く支持されている。このような現状を引き起こした要因は、歴史背景と制度上の問題に関連していると思われる。本稿では、主に歴史の角度から実技重視の美術教員養成教育の形成とその特徴について言及したい。

中国の芸術展を概観すると、全体的にリアリズムの表現が多い。歴史上、冷戦を背景とする中国美術の 1950～60 年代はソビエトの社会主義リアリズムに席巻された時代である。当時の美術教育界は写実的な絵画表現を大きいに奨励した。例えば、中国の有名な画家である徐悲鴻は、「デッサンはすべての芸術（美術学習）の基礎である。」と主張し、「新七法」という絵画教育方法をまとめ、学生にデッサンの基礎練習と写生画の制作を励まし、写実主義の美術教育を学校に押し広めた。従って、美術教員養成教育においては、当然、中国画と工芸のような伝統文化を代表する美術の教育も行うが、より写実的な美術表現が主流となっていた。そして、教師たちが学ぶ教職に関する美術教育法や指導法の科目も、子どもに現実生活で存在する物事を描写対象とする写生（画）の教育を勧める。このような美術教員養成課程の美術教育は、学生の観察力・思考力・記憶力と写実の表現力を高めるため、特にデッサンと色彩のような絵画基礎練習の授業時間数をカリキュラムに多く設置し、実技の基礎練習を重視する方向に偏りやすい。しかし、このような教育を受けて美術教師になった学生は、自らの美術家としての資質を高める創作活動に熱中し、子どもの意欲や考えに関心を寄せない結果をもたらしやすいのではないか。

美術家としての教養がどんなに優れていても、単なる画家では優秀な美術教師ということはできないのである。それに反して、教育者としての教養は充分身につけていても、それだけでも不充分である。学校が望ましいのは芸術的教養と教育的教養の両方をもつ美術教育者であろう。従って、美術教員養成教育は一方的な教育にならないように両者の調和を意識する必要がある。

3

3. 研究ノート - 14

Writer
佐藤 絵里子　SATO　Eriko
博士後期課程芸術専攻芸術学領域 3 年

データの声に耳を澄ます愉しみ

題材ルーブリックの協同的な開発過程に関する質的研究を通して

比喩の話から始めることを許してほしい。戈木版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下、GTA）の提唱者の戈木は、理論を生み出す過程を豆腐づくりに喩えたが、私は絹の反物を織りあげるのに似ていると思う。蚕の繭を鍋で煮て透明な糸を引き出し、撚り合わせる。植物の汁で染めあげ、機織り機にかける。常に事物と対話を続けながら、自然物を工芸品へ変容させていく営みが、生のデータの切片を、素材に変え（抽象化し）、色別にして（分類し）、柄を織りあげる（現象に説明を与える）過程と重なる。

GTA は、1967 年にグレーザーとストラウスによって紹介された仮説生成型の研究方法であり、「シンボリック相互作用論」を前提の一つとしていた。シカゴ派社会学の系譜に属するブルーマーは 1991 年に訳書の出された『シンボリック相互作用論－パースペクティブと方法－』（勁草書房）の中で、意味を「相互作用する人々の、定義という活動の中で、またこの活動によって、形成される産物」であると記している。グレーザーとストラウスは後年袂を分かつが、ストラウスと彼の共著者コービンに師事したのが戈木である。その特徴の一部は、理論が現実と乖離することのないように、複数の手続きを踏んでデータを抽象していく点や、分析者の物の見方が偏向している場合には、現象に筋道の通った説明を与えることを難しくさせる仕組みを内在している点にある。

現在私は、戈木版 GTA を用いて、教師たち（教員志望者含む）が、中学生が美術鑑賞授業で行った記述を協同で評価し題材ルーブリックを開発する過程を調査している。ルーブリックとは、任意の尺度と尺度ごとの記述語、事例集を備えた一種の評価規準表である。その開発には多様な方法があるが、本研究では、授業者が指導案で暫定的な指導目標を示しはするものの、参加者がそれに固執することなく、授業の成果に基づき指導目標を再構成することを重視した。昨年、3 名の参加者に集まってもらい、一学級分のワークシートを評価する協議会を開いた。そこでは、まずは個人単位で評価し、次に互いの意見を擦り合わせ、最後に記述語を文章化する。この話し合いの録音を文字におこして分析している。

分析を進めていくうちに、幾つかのポイントが浮上してきた。例えばその一つは、教師たちが通常の概念を変容させることによって意思疎通を行っていることである。彼らは、日常的に使われている特定の単語によって、本来ならばその単語とは関係のない意味内容を指し示しており、そのことによって評価が機械的なものとなることを防ぎ、個人の批評的な感じ方や考え方が評価に反映される余地を担保していた。例えば、絵画作品中に描かれた或る一つの物体の呼称が、その作品中に描かれた空間の編成を表している、というように。

しかし同時に、教師たちは彼ら自身が一種の符丁のようなもので理解しあっていることを自覚していた訳ではない。その上、彼らのルーブリックは第三者がその中で使用された単語の意味を、彼らと同じ意味で了解しうるようなものでもなかった。つまり彼らは、自分たちの判断や戦略の一部始終を把握していた訳でも、文章に反映させた訳でもなかった。それゆえ、結果的に記されたルーブリックよりも、経過的な判断の方にこそ価値があり、この二つは独立した思考の働きであると言えるのではないか。

ルーブリックの開発過程を現象によって説明する試みは、その社会的な意義に対する示唆を与えてくれる。今日もパソコンの画面上に並ぶ無数の切片に問いかけ、耳を澄ます。「君たちは、一体何になろうとしているのか」と。それは、美術室の生徒たちと交感しあう心情さながらである。当人の素質が事の連環を紡ぐという意味では、人も自然もデータも同様かもしれない。

イメージ図 （画像提供 123RF）